

第6回まちづくり部会 摘録

日 時：平成22年7月9日（金）9:30～12:00

場 所：京都市役所消防庁舎7階作戦室

出席者：

おおしま 大島	さちこ 祥子	スーク創生事務所代表，楽洛まちぶら会事務局
かずさ 上総	しゅうへい 周 平	国土交通省近畿地方整備局長
かも 加茂	みどり	大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所主任研究員
こじま 小島	ふさえ 富佐江	NPO法人京町家再生研究会理事・事務局長
◎ つかぐち 塚口	ひろし 博司	立命館大学理工学部都市システム工学科教授
さいとう 齊藤	おさむ 修	京都新聞社相談役
ふじい 藤井	さとし 聡	京都大学大学院工学研究科教授
ふじた 藤田	あきこ 晶子	株式会社京都リビング新聞社営業・編集統括マネージャー
みつもと 光本	だいすけ 大助	公募委員

1 開会

2 議事

塚口部会長

6月29日に第5回融合委員会を開催している。第5回融合委員会では、5月から6月にかけて実施した基本計画第1次案のパブリックコメントの結果を踏まえ、重点戦略などの修正を行っている。

本日は、まちづくり部会が担当する4つの政策分野についての精査を行うとともに、重点戦略についてのブラッシュアップを行いたいと考えている。

今後、あと1回のまちづくり部会を開催した後、融合委員会を経て、第2次パブリックコメントを実施する予定である。

(1) 第5回融合委員会の報告

——（事務局から第5回融合委員会の結果について報告）——

(2) 基本計画第2次案の検討について

——（政策分野20歩くまち に関する事務局からの説明）——

——（政策分野25道と緑 に関する事務局からの説明）——

塚口部会長

まず、政策分野ごとの推進施策の内容について、ご意見をいただきたい。その後、重点戦略についてもご意見を頂きたい。具体的な内容や、表現のわかりやすさや、施策の並べ方など、様々な面からご意見を頂きたい。

大島委員

歩くまちの推進施策の1番目の“世界トップレベルの使いやすさ”とは、技術的な使いやすさか、満足する割合が高いといったことをさすのか、どのような意図があるのか。

また、3番目のライフスタイルの転換にある“コミュニケーション施策”とは、具体的にどのような施策なのか。

さらに、みんなでめざす10年後の姿の3番目の“歩きたくなるまち”とは、単に道に人が溢れているということだけでなく、人々が回遊することによって、沿道の商店で消費が進んでいくといった、もう少し経済的な観点やまちづくりへの効果なども含めて表現しておく必要があるのではないか。

佐伯都市計画局歩くまち京都推進室長

京都市では、平成22年1月に「歩くまち・京都」総合交通戦略を策定している。策定に当たり、全ての交通事業者に入ってもらい議論したが、そこで、世界トップ

レベルとすることを目標とすると決めている。例えば、韓国の交通技術は、日本と比べ格段に進んでいるが、すぐに京都や日本で、韓国と同じレベルまで技術を引き上げることは難しいと考えている。市内のバス、鉄道は、それぞれ独立採算で運営されているが、これら交通事業者間のネットワークを構築し、その中で目標として、世界トップレベルを目指すということで、このような表現を使っている。

コミュニケーション施策とは、単なる啓発ではなくて、市民や観光客に対するアンケート調査を繰り返すことによって、交通行動を変えていこうという心理的な取組などを想定している。トラベルフィードバックプログラムというが、アンケートなどを繰り返すことによって、心理的に自動車利用を抑制してもらうよう促す施策を考えている。

歩きたくなるようなまちについては、単に人が溢れているというだけでないイメージを持っている。「歩くまち・京都」総合交通戦略では、将来のイメージを文章で表現しているが、ここでは、紙面の制約もあり、簡略された記述となっている。

大島委員

歩きたくなるまちについては、2行での記述になっているが、もう少しふくらましてよいのではないかな。

塚口部会長

関連して、推進施策の1番目の記述に、“ネットワークを構築し”とあるが、これは、交通網のことか、あるいは交通網とは別の事業者間のネットワークのことなのか。

佐伯都市計画局歩くまち京都推進室長

これは両方の意味を持っている。鉄道からバスへの乗換えといった交通の物理的なネットワークと、それを実現するための事業者間の連携といったネットワークの両方を意味している。

齊藤委員

この計画は10年間の計画であるが、“世界トップレベル”は目標として大きすぎるのではないかな。

3番目の施策については、啓蒙的・精神的な面が強調されているが、昭和40年代に全国でマイカー拒否宣言が行われたが、あまり効果がなかった。市民や事業者、行政はわかるが、観光客に対して、どのように啓蒙するのか。啓蒙的なことも重要だが、観光客には、歩いてきた方が楽しかったと思える仕掛けが大事ではないかな。

4番目の地下鉄については、沿線での土地利用転換を合わせてとあるが、東西線では5つの拠点事業が掲げられたが、そのうち二条駅ぐらいしか成功していないのではないかな。この10年の計画期間の中で、具体的なものを想定しているのか。

みんなで目指す10年後の姿の4番目について、歩いて買物に訪れて欲しいということはわかるが、大半の方が車で訪れている現状をどのように考えるのか。公共交通が便利でも自家用車を利用しているのが現実ではないか。

佐伯都市計画局歩くまち京都推進室長

基本計画そのものは、期間が10年間となっているが、「歩くまち・京都」総合交通戦略を進めていく中では、10年間という期間に拘らず進めていく予定にある。この戦略は京都市だけが進めるというより、交通事業者の方々に、主体的に進めていただく必要がある。京都市がいくら旗を振っても、交通事業者の方々が、それぞれで利便性の向上を進めると、ばらばらになってしまう可能性がある。そのため、交通総合戦略の審議会で、ひとつの理念、あるいは目標として定めている。

ライフスタイルの転換については、これは啓発・啓蒙というより、個々の心に訴えかける、心理学を応用したモビリティマネジメントの考え方を導入している。マイカー拒否宣言についても、まだ無くなっているわけではなく、その理念が受け継がれていると考えている。

観光客に対する働きかけとしては、平成13年度からパークアンドライドの取組を進めている。以前は、市域内に駐車場を設けて実施していたが、平成21年度からは、大津市や長岡京市、亀岡市など、周辺自治体と協議会を設置し、他都市の駐車場も利用可能なパークアンドライドを実施している。

また、市内の市営駐車場では、利用者に対して、健康面や経済面、渋滞に伴う時間ロスなど、車のデメリットと公共交通のメリットに関する情報を示すなどの取組を行っている。駐車場利用者に公共交通のインセンティブ情報を提供し、転換を促している。観光シーズンには、中部圏や中国圏の自治体にも働きかけているほか、観光政策との融合により、休憩場所や商業サービスなどを充実するなど、歩いて楽しいまちをつくるといった、様々な取組を展開している。

吉川交通局企画総務部長

地下鉄沿線での土地利用転換について、現在、東西線の山ノ内浄水場跡地の活用について、委員会を設けて土地利用転換のあり方を検討している。そのほか、烏丸通に面した繊維技術センターが、同志社大学への土地利用転換が進められようとしている。

民間の動きとしては、京都駅周辺で、イオンモールやヨドバシカメラの開業など、地下鉄沿線で、いくつかの土地利用転換が進められている。

大規模な土地利用転換以外には、今後、公共施設の建替えにおいて、駅周辺といったことを視野に入れるよう、庁内的に働きかけていく予定にある。

重点戦略の4つ目に、個性あふれる地域づくり戦略とあるが、その中に、地下鉄駅や公共空間の計画的な活用や各種機能の配置誘導を行うとしている。

佐伯都市計画局歩くまち京都推進室長

現在、市民のライフスタイルは、車に大きく依存している。政策的には、京都駅周辺や中心市街地は、駐車場整備地区に指定されているが、先般、駐車場基本計画を改定している。これまでは、駐車需要に合わせて駐車場を整備していく、基本的には駐車場を拡大していく考え方を持っていたが、京都の中心部への車の流入を抑制しようとする中で、駐車場の整備そのものを抑制する方向へ転換している。

また、市街地のデパートでは、駐車場料金の割引といった、車利用者への優遇が行われているが、今後、公共交通利用者に対する優遇を行うよう働きかけていきたいと考えている。

藤井委員

スローライフ京都プロジェクトについて、やはりコミュニケーション施策が、わかりづらいと思う。歩くまち京都を実現するためには、皆さんに車の利用を控えてもらう必要があることを、1行書き加えることが必要ではないか。

歩いて暮らせるまちづくりを、様々なメディアを通じて訴えていくといった方が、わかりやすいと思う。新聞などのマスコミのほか、ダイレクトメールや、学校教育で訴えていくことが必要ではないか。5年生の副読本には、「歩くまち・京都」総合交通戦略のことが記載されている。

また、職場内コミュニケーションでの公共交通利用を働きかけるなど、様々なメディアや機会を通じて働きかけていくことを記載してはどうか。

小島委員

この計画では、歩くまち京都が大きく取り上げられているが、まず、京都が歩きやすいまちなのか、楽しく安全に歩けるまちであるのか、みる必要がある。公共交通優先のまちということは理解できるが、その前に、歩くことのできる環境があるかどうか、根本的な問題があるのではないだろうか。

佐伯都市計画局歩くまち京都推進室長

この基本計画は、行政のあらゆる分野を網羅するため、紙面の都合上、ある程度の制約がある。「歩くまち・京都」総合交通戦略と合わせ、「歩くまち・京都」憲章を制定している。

ここでは“わたしたちの京都では、
市民一人ひとり、
健康で、人と環境にやさしい、歩いて楽しい暮らしを大切にします。
そして、市民と行政が一体となって、
だれもが歩いて出かけたくなる道路空間と公共交通を整え、
賑わいあるまちを創ります。
京都を訪れるすべての人が、歩く魅力を満喫できるようにします。”

ということを定めている。

この憲章は、市民、行政、観光客、関係機関が一体となって歩くまち京都を実現する行動規範となっている。

安全な道や環境をつくることは、この理念に盛り込んでいるが、計画での記述まではいたっていない。

上総委員

まちを歩いている時、自分のいる位置がわからないことがある。歩くことのできるまちをつくるためには、案内板を充実することも必要だろう。

推進施策の4番目の地下鉄について、最後の2行に、“地下鉄、市バスの経営改善”とあるが、京都市にとって、大きな課題であることはわかるが、少し違和感を感じる。歩くまちをつくることと、交通事業の安定化を一緒にしてよいのか。

佐伯都市計画局歩くまち京都推進室長

観光案内標識について、わかりにくいとの指摘もあり、今年の4月から観光案内標識のアップグレードプロジェクトとして、プロジェクトチームを発足し、取り組んでいる。藤井委員に座長になってもらい、民間交通事業者のサインも対象に、観光案内標識のガイドラインの作成を進めている。

吉川交通局企画総務部長

この部分は、事務局でも苦心した部分である。とりわけ地下鉄の事業経営が厳しいなか、平成30年までの経営健全化計画を策定し、安定的に地下鉄を運営していくための指針ができたところである。その重要なファクターとして、この10年間で乗客数を5万人増加することとしている。

この計画の記載にあたっては、“地下鉄を安定的に運営するために乗客数を増やすことが必要”、“5万人の増客に向けて、歩くまちを進める”、“歩くまちを進めるためには地下鉄が必要で、その安定経営のためには増客が必要”といったことが、鶏と卵のような関係となっており、ここに経営の安定化を記載することについて悩んだ。

ここに記載したのは、10年後の姿に、“地下鉄・市バスの一層の経営改善が図られ、市内の大動脈、市民の足としてますます重要な役割を果たしている”ということを受けた施策として記述している。

塚口部会長

道と緑に関してはどうか。

藤井委員

推進施策の4番目の市街地環境整備において、土地区画整理事業と道路や公園の

整備について記載されているが、先ほどの歩くまちの議論にあった、歩行者を最優先とする道路空間をつくるといったことと関連するのではないか。

鶴谷建設局都市整備部長

土地区画整理事業は、一定の面積の中で、道路、公園、河川などを整備し、道路の狭隘部分を広くし歩道を設置するなど、自由に歩ける空間をつくるということを目的にしており、にぎわいとうるおいのある空間をつくることにつながると考えている。

藤井委員

この項目は、土地区画整理事業に関する部分で、田の字エリア等の道路空間の再配分といった議論は別のところで行うということでよいか。

塚口部会長

道路空間の再配分についての議論は、他の項目で出てくるのか、または精査した結果、計画には記載しないということにしたのか。道路空間の再配分といった問題は、歩くまちの問題にも大きく関与すると思うが。

西邑建設局建設企画部長

道路空間の再配分といった観点は、歩くまちの2番目の施策に、“歩行者と公共交通を最優先とする快適な道路空間を構築する”としている。

塚口部会長

道路空間の再配分については、歩行者や自転車の問題もあるので、少し記述があってもよいかもしれない。

小島委員

推進施策の3番目の施策について、「打ち水」「門掃き」はわかるが、「しまつの心」は、文章として違和感がある。また、「しまつの心」は伝統的な知恵というより、優れた過去からの習慣というものではないだろうか。

西邑建設局建設企画部長

「しまつの心」は、モノを大切に使うといった意味で使っている。今ある道路や公園などの公共施設を、みんなで大切に使うといった意味で使っている。また、「しまつの心」は、より積極的な意味で、価値のあるものとして使用している。

小島委員

「しまつの心」というと、ここで伝えたいことより、大きな意味が出てくるので、

ここでは、道路や公園を大切に使いましょうといった、具体的に記載した方が、一般の人にはわかりやすいのではないかと。

塚口部会長

歩くまちと道と緑について、重点戦略との関連についてはどうか。

歩くまちに関して、重点戦略の1と2と4と5が関連する。低炭素型まちづくり戦略の基本的考え方では、“公共交通を有効利用した歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり”と、関連が示されている。しかし、歩いて楽しいまち・京都戦略の基本的考え方では、交通に特化しており、低炭素型社会との関連がないようにみえる。ここに、“低炭素型まちづくり戦略と連携しつつ”といった文言を追加することにより、歩いて楽しい京都戦略の意味がはっきりすると思う。

第5回融合委員会資料4の計画の構成をみると、重点戦略の上に京都の未来像が位置づけられており、重点戦略の考え方に京都の未来像と直接結び付ける部分が必要であると考えられる。

上総委員

6番目の新産業創造戦略について、産業を興していくときには、物流を考える必要があるのではないかと。今後、どんどん道路をつくるといった方向性はないだろうが、つながりはあると考えられる。

西邑建設局建設企画部長

産業と道路の関係について、まだ融合ができていない。今後、こちらからアプローチを行い再整理する。

小島委員

歩くまちについて、歴史・文化都市創生戦略も大きく関係するのではないかと。景観など、まちのなかにあるものを整理していく上で、歩くまちをつくることに関係が深いと考えられる。

藤井委員

1から27までの施策のうち、とりわけインフラストラクチャーや土地利用は、様々なことと関係が非常に深い。市のあり方を考える上で、色んなものに関係しているが、だからといって全てに丸を付けるというわけにもいかない。

まちづくり部会で議論をしていることが、非常に重要なものとなっていることを改めて認識した。

色んなものに関連していることを書いておくことはいいことである。

塚口部会長

この施策と重点戦略の関連表は、最終的な成果物に入ってくるものか。

柴山総合企画局政策企画室長

この資料は、部会における議論のための参考資料と考えている。最終的な成果物として想定をしていない。

塚口部会長

それでは、土地利用と都市機能配置及び景観の議論に移りたい。事務局から説明をお願いします。

——（政策分野 2 1 土地利用と都市機能配置 に関する事務局からの説明）——

——（政策分野 2 2 景観 に関する事務局からの説明）——

塚口部会長

5つの施策として整理されているが、よく似た表現がある。2番目のにぎわいのある魅力的なまちづくりと、4番目の個性豊かで魅力的なまちづくりは、施策名の表現をブラッシュアップするような意見があれば幸いである。

大島委員

「個性豊かで魅力的なまちづくり」の項目の座りが悪いと感じる。タイトルは、一般的な表現でありながら、内容は岡崎や山ノ内などのピンポイントな内容になっているためと考えられる。内容が具体的であるため、抽象的なタイトルでなくて良いのではないか。

山本都市計画都市企画部長

京都市全体の維持発展に向けた施策を考える上で、京都市では、大きく保全、再生、創造を基調としている。今後、エココンパクトなまちをつくっていくためには、地域、地域に応じた何らかのまちづくりや土地利用を展開していくことも必要と考えている。ここでは、岡崎や山ノ内を特筆しているが、それ以外の地域でも考えていく必要がある。そのためには、都市計画的手法だけでなく、産業政策や観光政策など様々な手法を用いながら、個性的で魅力的なまちづくりを進めていく必要があると考えている。

魅力的なまちづくりのフレーズは、部会長の指摘のとおり、かぶっているのを見直さなければならないと思う。

塚口部会長

例えば、4番目の記述について、ピンポイントな個別の説明から入っているが、

今の説明にあったよう、まず、市域全体としての考え方を説明したうえで、例示として岡崎と山ノ内を挙げてはどうか。市としての思いから岡崎と山ノ内から記載しているが、文章としては一般論から説明したほうがよいだろう。

2番目のタイトルは、都心部の内容に特化されているので、魅力的な都心づくりといったように整理してはどうか。

小島委員

4番目の個性豊かで魅力的なまちづくりについて、京都の土地利用は歴史性が大きく反映されており、そのあたりの歴史性を反映した記載が必要ではないか。

岡崎から南禅寺にかけては、かつて別荘地として栄え、景観を楽しむ要素があるなど、歴史性が地域の個性を生み出している。景観とも連動するが、歴史性があることから個性が生み出されているといった表現が必要ではないか。

山本都市計画局都市企画部長

指摘を踏まえ、ブラッシュアップを行う。

藤田委員

土地利用についてみると、北部についての記述がみられない。京都市として北部についてどう考えているのか示す必要があるのではないか。例えば、個性豊かで魅力的なまちづくりの項目に、北部の自然環境について触れてはどうか。

塚口部会長

ここには、地域的なことについて配慮されているのか。南の発展と北の保全といったバランスについてはどう考えているのか。

山本都市計画局都市企画部長

基本方針に「保全、再生、創造」の都市づくりを基調とするとしており、北部の保全は、ここで位置づけている。推進施策における北部の記述については検討を行いたい。景観分野では、若干、北部についても記載している。

光本委員

一般市民の中には、ここに記載されないと置き去りにされたと考えている人もいる。地域的な配慮が必要ではないか。

山本都市計画局都市企画部長

京都は、どこの地域にも個性があると考えている。そのような個性を大事にしたまちづくりを考えている。例えば、景観まちづくりセンターなどが地域に入り、そこで地域の個性を発掘し、まちづくりを進めていこうと考えている。

加茂委員

推進施策の2番目は都心部，3番目は南部，4番目は市内各地のことであるということが，はっきり読み取れるようにしてはどうか。そのうえで，4番目に北部などのその他の地域のことが読み取れるようにしてはどうか。

地域それぞれの資源を丁寧に発掘していき，それを活かして地域それぞれに個性のあるまちづくりを進めるといったスタンスを説明すると，読み手の印象が随分変わるのではないか。

上総委員

感想めいたことだが，田の字地域やらくなん進都，山ノ内地域など，京都市民以外は，ほとんどわからないのではないかと。少し記述方法について考える必要があるのではないかと。

柴山総合企画局政策企画室長

この中に記載されている具体的な内容については，京都市民の方でもあまり知られていないことや場所もあると思う。最終的には，注釈を加えるなど，誰が読んでもわかるようなものにしたいと考えている。

塚口部会長

分かりやすさは大切だろう。

齊藤委員

3つ目の創造を続ける南部地域のまちづくりについて，学研都市など，広域的な地域の連携についてはどうなるのか。

島田都市計画局都市政策担当部長

この部分は，らくなん進都まちづくり推進プログラムの内容を，圧縮して記述している。そこには，域内連携はもとより域外連携も含んでいる。

藤井委員

歩くまちでは，歩行者優先という言葉の裏に，自動車規制や脱車社会といった規制的な手法を導入するとしている。この分野では，土地利用規制という手法を活かして進めることとなるが，この部分はどうか読み取ればいいのか。

山本都市計画局都市企画部長

推進施策の一つ目に，自動車に過度に頼ることなく暮らせるよう，都市機能配置や市街地環境整備を進めることを書いている。また，現在，都市計画マスタープランを検討しており，市街化区域や調整区域の土地利用について検討を進めていると

ころである。この段階では、具体的な記載が難しく、今後、都市計画マスタープランの検討や手続きを経て、土地利用に関する考え方を明らかにしたい。

藤井委員

具体的な場所に係ることについては、記載は難しいと思うが、大きな考え方は示すことができるのではないか。京都市は、土地利用の完全な自由は認めていないと思う。コンパクトシティの意味の裏側に、規制があることをわかるようにしておくほうが良いと思う。

塚口部会長

わかりやすさの観点からは、土地利用の細かいことでなく、基本的な考え方について記載が必要だろう。具体には都市計画マスタープランで説明すれば良いと思う。

小島委員

土地利用も景観もまちづくりを支えるしくみづくりに、(財)京都市景観・まちづくりセンターと、具体名が出ているが、京都市には他にも財団法人はあると思うが、ここは特殊な意味があるのか。

山本都市計画局都市企画部長

特に深い意味があるわけではない。景観面や土地利用で、市と協力して取り組んでいる組織であるため記載している。他にも組織があるなかで、記載方法については再考したい。

加茂委員

緑の保全に関して、景観の10年後の姿では、市街地の緑化推進、三山の森林再生活動が進みとあるが、推進施策では、三山の保全の記述のみとなっている。

京都のまちでは、普段、何気なく見ている市街地内の緑地が重要である。民家の花壇など、細かな緑化を推進する記載があってもよいのではないか。

3番目と4番目のタイトルが似通っている。4番目のタイトルは、10年後の姿の“無電柱化等による歩く魅力を感じ、にぎわいのあるまち”に対応すると思うが、10年後の姿のタイトルの方が、具体的な内容となっており、タイトルとしては逆ではないか。

3番目の内容は、10年後の姿の“京町家のくらしや空間、まちづくりの文化が継承・発展されている”に対応すると思うが、施策内容がハードに関するもののみとなっており、暮らしや文化を継承するといったニュアンスも必要ではないか。

先ほどの組織名称が記載されているといった指摘と合わせて考えると、地域の絆を大事にしようというより、組織が前に出てきている印象を受けかねない。文章表現を見直すことによって、読み手の印象が変わると思うが。

高谷都市計画局都市景観部長

市街地の緑化について、街路樹や公園等における緑化推進があるが、「道と緑」の分野があることから、そちらに記載している。

3番目と4番目のタイトルについては、指摘に応じて見直す。

歴史的な町並みや京町家等の保全については、ハードの保全によって、文化や暮らしの継承ができるという意図がある。推進施策としては、この表現とさせていただく。

景観まちづくりでは、あらゆる主体がコラボレーションしながら進めようと考えている。個別名称については、記載の方法を再検討する。

塚口部会長

3番目と4番目とともに、2番目と4番目も比較的似通っているので、併せて再考を。

大島委員

まちづくりの項目は相互に係っていることが多いため、景観の中で取り上げるのか、住宅で取り上げるのか検討は必要であるが、住宅を作っていくときの事業者の役割も重要ではないか。10年後の姿に、京都の景観に馴染む新たな住宅をつくることによって、市民も事業者もメリットがある、良好な循環が生まれているといったことが、10年後には可能ではないか。平成の京町家の取組が進められているなかで、このような10年後の姿を描くことが可能ではないか。

重点戦略の歴史文化創生戦略と係ると思うが、事業者の役割として京都らしい建物をつくるということがあげられると思う。この部分については、大きな方向から具体的な取組を結ぶ部分なので、丁寧に記載したほうがよいのではないか。

塚口部会長

重点戦略についてはどうか。

大島委員

計画の体系としては、重点戦略があって、それぞれの施策がぶら下がっている。

重点戦略のボリュームによって、書き込む内容が変わってくると思う。先ほど指摘した住宅の取組は、重点戦略のボリュームによっては、細かすぎる内容になる可能性もある。重点戦略に記載があるものと無いもののバランスがとれていないように感じる。

塚口部会長

最終的には、紙面の取り合いから調整が行われると思うが、現時点では、重点戦略として必要と思われることを指摘していただきたい。

加茂委員

重点戦略の4番目の個性あふれる地域づくり戦略について、市民の自主的なまちづくり活動の支援に含まれるかもしれないが、行政の役割として、地域の魅力を丁寧に発掘していくということが必要ではないか。

山本都市計画局都市企画部長

支援という部分では指摘のとおりかと思う。行政ができることとしては、一緒に考えていくことになると思うが、記載方法については工夫する。

藤田委員

観光都市づくり戦略について、「旅の本質」というフレーズがよくわからない。旅の本質は、旅する人それぞれの価値観によるものと思う。ここでは、京都でしか体験できない、といった表現の方が適切ではないか。

柴山総合企画局政策企画室長

「旅の本質」については、現在、観光政策で使っているフレーズだが、今の指摘のわかりやすい表現について、産業観光局と調整したい。

(3) 全体をとおしての意見交換

塚口部会長

4つの政策分野全体をとおした議論を行いたい。重点戦略については、この部会だけでは決められないが、重点戦略における提案をこの場で行いたい。

大島委員

重点戦略の中に、京都らしさをどこまで盛り込むのかといったことからみると、真のライフワークバランス戦略は、一般的な世の中の傾向に応じたものとなっている。他は、京都の特徴を反映したものとなっている中で、これだけ異質なものとなっているように見える。

塚口部会長

先日の融合委員会において、未来の担い手・若者会議U35からの提案で盛り込むこととなった項目で、こなれた形になっていないという経過がある。

柴山総合企画局政策企画室長

これは新たに付け加わった項目で、まだ十分に練れたものになっていない。今後、各部会で議論し、次の融合委員会で結論付けたい。例えば、京都は地域コミュニテ

ィに特色があり，そのような特色を活かした社会貢献といったことを盛り込み，京都独自のワークライフバランスといった戦略にしていこうといったことも考えられる。今後，部会，融合委員会等で御意見をいただき検討したい。

藤井委員

真のワークライフバランス戦略について，基本的な考え方の1文目に，歴史と伝統文化を担う京都に住まう私たちは，といった文言を加筆し，京都に住まう私たちのワークライフバランスを進めるとしてはどうか。

小島委員

以前，町家を活かしたまちづくりを考えたときに，職住共存が大きなテーマであった。職住共存地区は，子育てしながら働き続けられるまちであり，歴史的な背景も踏まえた文言を考える必要がある。

市民の役割や行政の役割に，いいことばかりが書かれているが，みんなが我慢して，より高いレベルを目指さないといけないと思う。町家の暮らしでも，ちょっと我慢して頑張らないといけない。苦労はあるが，一緒に頑張りましょうといった，統一した見解が必要ではないか。

塚口部会長

基本的な姿勢，スタンスは必要でしょう。

柴山総合企画局政策企画室長

我慢しなければならないといった基本的なスタンスについては，今のところ想定はしていないが，個々のところで不十分であれば，どこかに追記したい。融合委員会の場などで相談したいと思う。

加茂委員

こどもの視点から見たまちづくり，景観，建物といった観点が必要。

子どもを育てることができるといった，親の視点からではなく，子どもが安心して暮らせるといった，こどもの視点からの記載が必要ではないか。

塚口部会長

4つの分野別の基本方針を比較すると，道と緑では，具体的な取組によって，目標を実現するといった記述となっている一方，歩くまちは，目標を実現するために，具体的な取組を行うといった記述になっている。

歩くまちは，“市民，事業者，行政が一体となって「歩いて楽しいまちづくり」を推進することにより，クルマを重視したまちとくらしを，京都にふさわしい「歩く」ことを中心としたまちとくらしに力強く転換していく”とした方が，転換する

ことが強調される。

土地利用と都市機能配置については、3行目から4行目にかけての“個性的な土地利用の展開を図れるよう”という部分がわかりにくい。手段方法を言っているのであれば、“土地利用の展開を図ることにより”といった表現にしてはどうか。

景観については、これでよいのではないか。

加茂委員

歩くまちの5番目の推進施策について、これまでの議論からは、歩くまちにふさわしい、きちんとしたマナーを利用者に求めることになるのではないか。タイトルとしては、自転車利用における歩くまちにふさわしいマナーの定着などとしてはどうか。

歩くまちの1番目の推進施策について、3行目の“効果的な情報提供策の実施”と、“時期的・地域的課題への対策”の意味がわかりにくい。例えば、公共交通利用促進のための市民への情報提供や、観光トップシーズンや観光地における局所的な交通渋滞への対応などとしてはどうか。

塚口部会長

本日の重点戦略の議論は、8月9日の融合委員会に提示したい。

また、本日の検討結果の反映については、部会長に一任させていただく。

———（異議なし）———

3 その他

塚口部会長

事務局から連絡事項などあればお願いします。

柴山総合企画局政策企画室長

次回のまちづくり部会は、7月29日（木）午後6時から2時間半を予定しているので、よろしくお願いしたい。

4 閉会